

日独文化交流を支えた人々

Förderer des japanisch-deutschen Kulturaustausches (1)

第1回 旧制松江高等学校教官 フリッツ・カルシュ博士

Lektor an der Matsue Kotogakko Dr. phil. Fritz Karsch (1893-1971)

東京医科歯科大学教授 工学博士 若松秀俊

Dr. Eng. Hidetoshi Wakamatsu, Prof. der Tokyo Medical and Dental University

本誌本年5月号「表紙」の主人公で戦前、旧制松江高等学校(現島根大学)のドイツ語の講師として、14年間にわたり教壇に立ち、生徒に大きな影響を与えたドイツ人哲学者、フリッツ・カルシュ博士が亡くなって30年になる。いまや、ほとんど忘れられている彼は、認識の発展過程を考究する人智学を提唱したシュタイナーを日本に紹介した人物でもある。21世紀を迎えて、日本を第二の故郷として愛した同氏を顕彰することは日本だけではなく、日独関係や日本の哲学史研究の上からも大きな意味がある。彼は明治26年、ドイツ東部のプラゼビッツで父ヘルマン、母ルイーゼの間に生まれ、昭和46年にカッセルで没した。大正15年にプラーグ氏の後任として松江高校に赴任、多くの人材を育てた。同時に日本の哲学や宗教の研究に力を注ぎ、また外交官として終戦まで働いた。松江を選んだのはラフカディオ・ハーンの影響による。彼の薫陶を受けた生徒の中には、政界では衆議院議員で、自治相を務めた赤澤正道(昭和2年卒業の4期文乙)、元島根県知事伊達慎一郎(5期文乙)、元衆議院議員の榎橋勇(6期文乙)、衆議院議員、國務大臣十回、衆議院議長を歴任した福永健司(7期文甲)、元衆議院議員の高田富之(9期文乙)、衆議院議員で自民党総務会長、行政管理・防衛庁長官、運輸大臣を歴任した細田吉蔵(9期文甲)や元衆議院議員・労働大臣の山手満男(11期文乙)がいる。外交官としては元イラン・インド・中華民国・ブラジル大使歴任の宇山厚(9期理甲)、海外移住事業団理事、ウルクアイ大使歴任の大城齊敏(10期文甲)がいる。

法曹界では、大阪弁護士会会長、日弁連会長を務めた和島岩吉(5期文乙)、元広島高裁長官の松本冬樹(8期理甲)と同じく元広島高裁長官矢崎憲正(10期文乙)、元福岡高裁長官、国土館大学長を務めた綿引紳郎(15期文乙)が挙げられる。

学術界では「長崎の鐘」で有名な元長崎医科大放射線医学教授の永井隆(5期理乙)、元島根大教授・元琉球大教授の酒井勝郎(5期理乙)、元滋賀大文学教授で雑俎史研究家の宮田正信(9期文乙)、元北海道大印度哲学教授、僧侶で鈴木大拙の後継者の古田紹欽(10期文乙)、元大阪大教授微生物病研究所長で紫綬褒章を受章したウィルス分離研究の奥野良臣(14期理乙)、芸術界では元カルフォルニア州立フロンソン大教授、また舞踏家でドイツ留学後欧米の舞台で活躍(元当協会会員)した邦正美(8期文甲)、岸田国土の劇作同人、大映グランプリ羅生門のプロデューサー・放送作家を務めた異能の士である辻久一(9期文乙)、「暮らしの手帖」社設立、編集長を務めた花森安治(10期文甲)など枚挙に暇がない。

彼は明治44年、ドレスデンにおける国際博覧会で「日本」と出会い、日本に強い興味を抱いた。第一次大戦に志願兵として従軍した後、マールブルク大学でハルトマン門下として哲学を学び、大正12年に哲学博士の学位を



1930年ころの
カルシュ博士



左よりエツメラ夫人、長女メヒテルト、次女フリーデルン、カルシュ博士(1938年頃)

取得、人智学の研究組織に加わった。大正15年10月に、あこがれの日本に来た彼は松江市奥谷町の官舎に住んだ。そして昭和14年3月にシュヴァルベ氏と交代するまで教壇に立ち、この地で妻、エツメラとの間に、長女、メヒテルト(昭和3年生)、次女、フリーデルン(昭和12年生)に恵まれた。彼は絵が趣味で、余暇には愛する松江や周辺の田園を精密に描写した。彼の描いた宍道湖、嫁が島、袖師が浦、大山、山陰の農村のバステル風景画が現在も二人の娘の手許に保存されている。

また、当時の松江の貴重な写真を数多く残している。彼は生徒にヨーロッパの文化を伝えながら、同時に自らの精神生活を磨き上げた。当時の日本を深く愛し、日本人々を慈しみ、自分の持てる知識を惜しみなく生徒に伝えた彼の著述には『カントとハルトマンの比較論述』(日独文化協会、昭和3年)があり、その他ドイツに関する著述(同協会、昭和9年)がある。同僚の高橋敬視教授によるハルトマンの著者の翻訳は彼の紹介と協力によるものであった。昭和12年復活祭の期間に英語講師のウッドマン氏の住む隣家が火の不始末から火災に遭遇したが、近所の助力により鎮火した。そのときの印象がますます日本を好きにした。

同博士に関しては、門下の酒井勝郎氏が『田舎の大学』(私家版、昭和45年)で記述し、同窓会誌「翠松」や旧制松江高校史の「嵩のふもとに」で彼の人物を当時の生徒が語っている。

松江高校を離任した彼はドイツ大使オット氏の仲介で

15~20年まで国会議事堂近くの大館に勤務する
となり、そこで終戦を迎えた。カルシュ氏は日本の
政や文化の多様性に対する共感や人間肯定のために想
々の世界を自らの精神に描くことの重要性を語り、人
学的にみた東洋哲学史の膨大な未刊行原稿を残した。
在米国に住む長女らが整理中だ。内容は哲学史と有史
家人の意識の進化に関すること、また学問や内的修練
より、シュタイナーの思想にいかんして到達可能か
に於てである。行動的人哲学者としてこれを広めよう
と、戦時中のドイツではこの関連学会は禁じられた。
と、宗教哲学への興味から西田幾多郎や鈴木大拙らと
親交もあった。両親から影響を受けた長女は自らその
先を行き、次女はマールブルク大学で学位を取得し、
アルドルフ学校の教員になった。日本では「シュタイナ
学校」と呼ばれ、その全人教育には興味深いものがある。
122年に帰国した彼はマールブルクで成人教育に従
し、日本大使館や日本の著名人との親交を持った。昭
36年には年金生活に入り、キリスト共同体の古巣のカ
ヘルに移住して研究を続けた。
昭和43年には、かつての生徒から招待を受け、日本各
を訪問し、彼らと親しく過ごす時間を得た。この時、
は出雲大社で、至聖の神に對面する願いがかなえられ、
の天命に対して神々に感謝の言葉を述べたという。1

ヶ月の滞在後帰国した彼は45年に金婚式を祝い、翌年、
脳腫瘍のために亡くなった。

彼は少年期に夢見た風景を松江周辺に見ることができ
たことを、自らの人生の終末期に、周囲の者によく語
っていたという。

戦中戦後の混乱のために彼の足跡の記録が乏しくとも、
奉職期間から言って有形無形の功績が少なくないと確信
していた。彼の足跡と言動を少しずつ確認する中で、彼
の教え子の多くがいまなお彼を心底から敬慕しているこ
とを知って、改めて彼の業績を調べる必要性を痛感して
いる次第である。

「袖すり合うも他生の縁」というが、偶然が縁もゆかり
もなかったカルシュ氏と私を結びつけた。私は30年前
前にドイツ学術交流会(DAAD)の奨学生として、ドイツの
大学で研究生生活を送った。ドイツの文化とそれを生んだ
風土に若き日に触れる機会を与えられた私がシュトゥ
ットガルトでカルシュ氏の娘さんに出会ったのがはじまり
であった。その経過は単なる偶然と思えない出来事の連
続からなっていた。彼は日本では残念ながら名の無い哲
学者であるが、僅かな手掛かりから彼の足跡を追う中で
彼の偉大さを知った。何とか彼の功績を公平な眼で見
てあげたいと思い筆をとった。

sammenfassung:

ist mir eine große Freude, über einen bis heute
bekanntesten deutschen Wissenschaftler und seine
Leistung in Japan und seine Beiträge zu Japan
sprechen zu können.

Ich traf Frau Dr. Friederun Karsch zufällig in
Stuttgart. Unsere Unterhaltung drehte sich um ihren
Vater Dr. Fritz Karsch, der an der Nationalen
Hochschule Matsue gelehrt hat. Aus den
Informationen von Dr. Friederun Karsch und den
ehemaligen Schülern konnte ich seinen Lebenslauf
und seine Leistungen ersehen und wie er, ein Mensch
von Format und Charakter mit seinem fesselnden
Vortrag und seinen beeindruckenden Vorlesungen
einen tiefen Eindruck bei seinen Schülern
hinterlassen hat. Durch den persönlichen Austausch
mit seinen Schülern entstanden enge Freundschaften.
Trotz der Wirrungen in und nach dem zweiten
Weltkrieg gingen seine Leistungen bedauerlicher-
weise verloren. Daher geriet er in Vergessenheit. Wir
wissen aber, dass z.B. 7000 Seiten an
veröffentlichten Manuskripten bei seiner Tochter
Mechthild in den USA aufbewahrt sind.

Auf Grund der Informationen, die ich von den zwei
Schülern erhalten habe, bin ich nun in der Lage mehr
über das Leben und Wirken von Dr. Karsch zu
berichten. Dr. Fritz Karsch war Lehrer für Deutsch,
Literatur und Philosophie an der Nationalen
Hochschule Matsue von 1925 bis 1939. Mit seiner
Frau Emmela hat er zwei Töchter, Frau Dr.
Friederun Karsch, Lehrerin, wohnhaft in Marburg.
Seine andere Tochter ist Frau Mechthild St. Goar in
Attanooga, Tennessee, USA. Dr. Fritz Karsch
kehrte mit seiner Familie im Jahre 1939 nach
Deutschland zurück. Anfang 1940 kam er als
Diplomat mit seiner Familie wieder nach Japan. Sie
lebten bis 1944 in Yokohama, von 1944 bis 1945 in

Tokyo in Seijo und in Karuizawa von 1945 bis 1947.

In Japan ist der Journalist und Schriftsteller Lafcadio
Hearn öffentlich ausgezeichnet worden, weil durch
ihn zum ersten Mal im 19. und 20. Jahrhundert Japan
in Europa bekannt wurde. Aber bei unserem Dr.
Karsch kann man vermuten, daß er während seiner
Lehrtätigkeit und durch seine Verdienste als
Diplomat in seinem insgesamt 22jährigen Aufenthalt
in Japan einen noch größeren Beitrag für das
Verständnis unserer Länder geleistet hat. Tatsächlich
gibt es viele bekannte Persönlichkeiten unter seinen
Schülern, die sich große Verdienste in verschiedenen
gesellschaftlichen Kreisen erworben haben. Bis jetzt
konnte ich viele Untersuchungen und Erkundungen
durchführen, die beweisen, wie Dr. Karsch das
damalige Japan von Herzen liebte und besorgte war,
seinen Schülern seine Erkenntnisse weiterzugeben.
Ich hoffe aufrichtig, daß er breiteren Schichten der
japanischen Bevölkerung bekannt gemacht werden
kann.

Am Ende möchte ich erwähnen, daß ich als Stipendiat
des Deutschen Akademischen Austauschdienstes von
1973 bis 1975 an der Universität Erlangen-Nürnberg
im Bereich der Biokybernetik forschen konnte. Dabei
hatte ich die Gelegenheit, mich in Deutschland mit
der deutschen Kultur bekanntzumachen.

Und dann wollte es der Zufall, daß ich während der
Zeit des Internationalen Kongresses in Deutschland
eine der Töchter von Dr. Fritz Karsch begegne. Es
kommt mir vor, als wäre es eine Schicksalsfügung,
daß ich mich mit dem Leben dieses interessanten
Menschen beschäftigen darf. Ich bin sehr froh, daß ich
Ihnen Dr. Karsch kurz vorstellen konnte.

次回は「玉井喜作—明治31年ドイツで初めて日独両国語
の雑誌刊行—」

<編集後記>

■今月号の表紙はハンブルク独日協会理事の湯地弘氏の御尽力により実現したものである。湯地氏は戦後(57年から65年迄)日独政府間協定に基づいてドイツに送った500余名の炭坑技術習得派遣者の一人として57年から60年ルールの炭坑で働かれた後、ずっとドイツに留まり、日独経済・文化交流の為に尽力された。私の8年のハンブルク在勤中、独日協会の行事に常に積極的に協力され、穏やかな人柄と行動力で人々の尊敬を集めて居られた事が思い出される。また日本航空ハンブルク支店職員として日独両国民の渡航の便宜を計られ、お世話になった人は数え切れない。この7月にドイツ政府から功労勲章を授与されたのは当然の事で心よりお祝い申し上げる次第である。(織)

■この時期人類の平和、叡智に思いをはせない人はいないであろう。正義の遂行には無辜の民の犠牲を伴う。私たちにできることは異なる文化、宗教等を

知り、互いに譲歩、妥協できる位置を探り、相手を認めることでしかない。これはまさに論壇でフォンドラン氏が提言しているところであり、また、氏の提案する実習生交換プログラムは、柔軟な若い心に寛容と融和の精神を確立させる場を提供することになる。協会の活動が小さな一滴となることを願ってやまない。(楡)

■今月の「時事問題研究会」では、ドイツ現代女性の抱えている問題を取り上げ、過去1年、鹿児島に研修のため来日、つぶさに日本女性も観察して、先般帰独したB・ロートさんのエッセイを小林千鶴子編集委員に翻訳願い、研究会の席上で朗読を公表してもらった。

問題が問題であり、特に、最近ドイツで起こっている女性をめぐる諸現象については、当日の出席者は勿論、会員の中にも様々な感想を呼び起こしたと思われるが、これもドイツの今の社会相の一端なのかもしれない。ロートさんのエッセイ

は突き詰めれば「ドイツ女性は結婚志向よりもキャリア志向」ということかもしれないが、近着の「Spiegel」誌のように「Comeback der Mutter」と全く反対の現象を取り上げる向きもあり、一般論化は慎重であるべきか。

いずれにしても、今月の研究会は質疑に入って大いに盛り上がった。今後も、研究会としては身近な問題も取り上げていきたいと思うし、会員の方々の一層の積極的参加を期待したい。(福)

■新連載「日独文化交流を支えた人々」がスタートした。第1回は旧制松江高校ドイツ語教師フリッツ・カルシュ博士である。執筆者の若松秀俊・東京医科歯科大学教授によれば、カルシュが偉大な哲学者であるにもかかわらず、日本では残念ながら名の無い哲学者として扱われているという。こうした日独「架け橋」の先駆者を発掘すべく、会員諸氏の活気あふれる寄稿を期待したい。(大)

日独協会ドイツ語講習会 2001年度下半期コース (2001年10月～2002年3月)

1. クラス (全20回、各クラス共定員約20名)

Aクラス (初級会話1) : 毎週火曜 (10/2～)
講師: Max Seinsch 先生 (慶應義塾大学講師)

テキスト: Themen neu 1 (Lektion 6より)

Bクラス (初級会話2) : 毎週水曜 (10/10～)
講師: Roman Truhlar 先生 (ゲーテ・インスティトゥート講師)

テキスト: Themen neu 2 (Lektion 5より)

Cクラス (中級会話1) : 毎週木曜 (10/11～)
講師: René Grino Findor 先生 (ゲーテ・インスティトゥート講師)

テキスト: em Brückenkurs DaF für die Mittelstufe (50ページより)

S1クラス (初級会話3) : 毎週土曜 (9/22～)
講師: Dr. Klaus Schlichtmann 先生 (上智大学、ゲーテ・インスティトゥート講師)

テキスト: Themen neu 3 (Lektion 4より)

S2クラス (中級会話2) : 毎週土曜 (9/22～)
講師: Dr. Klaus Schlichtmann 先生 (上智大

学、ゲーテ・インスティトゥート講師)

テキスト: Grimms Märchen

2. 授業時間 (途中、10分間の休憩あり)

平日クラスは 18:30～20:40

土曜 S1クラスは 10:00～12:10

土曜 S2クラスは 13:15～15:25

3. 教室 当協会事務所

4. 受講料 (6ヶ月)

法人会員: 30,000円

個人会員: 40,000円

5. テキスト代

Aクラス: 4,500円

Bクラス: 4,700円

Cクラス: 4,300円

S1クラス: 5,000円

S2クラス: 600円

お申込ご希望の方は空き状況を事務局にお問い合わせの上、案内書をご請求ください。各クラスとも定員に余裕がある場合、途中からの参加も受け付けます。